

ヘンリー・ジェームズの『ねじの回転』

—記憶と認識をめぐる諸問題—

入江 識元

(平成13年3月30日受理)

要 旨

ヘンリー・ジェームズの中編『ねじの回転』は視覚や聴覚が形成する認識と記憶の構造についてすばらしいモデリングを提供する。実際『ねじの回転』ほど主人公の認識のメカニズムが複雑な作品も珍しいし、これらは全て作家ジェームズが仕組んだプロットであるが、こうした「語りの多重性」が語りの歪みと曖昧性を生み、幽霊の出現を読者に納得させる。この作品の視点について考察する場合、まず女家庭教師の視点の曖昧性に注目するだろう。伝統的なイギリスの教養を身につけた彼女にとって、上流階級の豪邸やそれを取り巻く美しい自然は、彼女の想像力を掻き立たせるに十分な素材であったし、理性的な教養人たる彼女は、その後次々に出現する幽霊を理性的な証明により合理化する。そしてこの物語の信憑性は全てこの女家庭教師のロマンス熱に浮かされた「眼差し」に委ねられている。彼女は相手の見せる表情から疑念を持ち、想像を増幅させるに至る。この作品はラカンやカント、ハイデガーなどが提示した強迫神経症や純粹理性や時間的存在といった哲学的問題とも絡めて論じることができる。この作品はそうした問題について解決の糸口を与えていることは間違いない。

キーワード

眼差し、幽霊、理性的教養人、想像、強迫神経症、時間的存在

1. ジェームズを語るということ

1.1. イントロダクション

かつてイーグルトン (Terry Eagleton) は初心者向けの文学理論の本のなかでこう言ったことがある。「そこでまずそのような問題を一つだけ考えてみることにしよう。私がこれを書いている時点で、世界には六万をこえる核弾頭があると推定されている。そのなかの多くは、広島を破壊した原爆の数千倍の威

力がある。こうした兵器が私たちの生きていく間に使われる可能性は年々増している。核兵器に使われる費用は概算で、年に五千億ドル、一日に換算すると十三億ドル。この総計の五パーセント——二百五十億ドル——もあれば、貧困にあえぐ第三世界がかかえる諸問題を、一挙にしかも根本的に緩和することが可能である。こうした問題よりも文学理論の方が重要だと信ずる人間がいたら、たしかにその人間は変人扱いされてもしかたあるま

い。」(194) 初学者のための本のなかで、しかも最終的な結論として政治的批評を持ち出すことはとても勇気の要ることだが、このように時事問題を引き合いに出すと説得力が出る。その点イーグルトンはもっとも楽な道を選んだと言える。なぜなら、核や第三世界の貧困は時事問題のなかで最もクリティカルなものであり、そうした問題の前では、文学はきわめて無様だからである。しかし、我々の選択肢はひとつだけなのであろうか。つまり、政治の価値を肯定するがゆえに文学を政治に結びつけ迎合させるより他に方法は残されていないのか。我々の関心事は人そのものである。文学は虚構であり、架空の人物を扱う。だが、たとえばラカン (Jacques Lacan) がエメの臨床例を取り上げるのと全く同じ理由で、我々は女家庭教師や大佐を例示することができないとしたら、それはおかしい話だ。なぜなら両者とともに、読み解かれる「テキストとしての人物」ということにはかわりはないからである。様々な文学理論が出現し、文芸批評界も混迷を極めていくが、これらも全て、法学や科学、政治学に対する、文学という一種浮世離れした風流な世界に身を置き飯の手段を得る学者の引け目の裏返しという見方もできるかもしれない。しかしながら、これは文学研究が全く架空の人物——つまり作家の創った人を扱う学問であって、実際に生きる我々とは何の関わりもない、という前提に立つ場合である。

では文学研究は生きる我々とは何の関わりもないものなのか。つまり、文学上の人物や出来事はあくまで架空の人や物、作り物であって、我々の実在する社会とはかけ離れているものなのであろうか。答えを待つまでもない。文学を読むということはすなわち、生きることなのであり、我々の生そのものである。ドゥルーズ (Gilles Deleuze) は *What Is Philosophy?* のなかでこれを哲学に置き換えたが、文学上のあらゆる概念は抽象ではなく、

常に／すでに実在であり、具体的な我々一人一人の中に存在するのである。文学を研究するという行為は、空想の世界に遊ぶ行為などでは断じてなく、まさに、実在する現代社会の抱える情緒や感情の起伏、精神的不安といった問題を解明する手がかりとなるのである。

さて、ここで私は一人の偉大なる作家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) の代表的な中編『ねじの回転』 (*The Turn of the Screw*, 1898) を扱うことになるが、本論文の主題はジェイムズを、ただ文学上のキャンノンとして扱うのではなく、ジェイムズの短編の中に登場する人物を分析することにより、人間の視覚や聴覚などから形成される認識と記憶の構造について明らかにすることにある。認識は言うまでもなく、人間の精神構造の根幹を決定するものであり、それは精神構造をともしれば根底から揺るがす存在にもなる。我々はその認識を視覚や聴覚をはじめとする五感に依存しているのである。ここでは、特にこの視覚や聴覚の認識への影響と、そこから生じる様々な哲学的問題とジェイムズの関係について検討してゆく。

1.2. ヘンリー・ジェイムズという作家

ジェイムズがアメリカにおける優れたキャンノンの数々を生産した作家であることに意義を唱える者はおそらくいないであろう。だが、ジェイムズがいかなる点において優れているのかを問う場合、それが内容によるものなのか、表現によるものなのかを確言できる者もおそらく少ないであろう。ジェイムズの作品は表現において、文体において難解なものだとよく言われる。だが、内容が難解であるからとか、英文が難しいからという理由でその作家の作品を優れているとか優れた作家であるとかを言うのは少々芸がない気がする。

ジェイムズの作品は特に後期において「円熟した」とはマシーセン (F.O. Matthiessen)

の弁である。だが、作家が「成長した」とか「円熟した」とはいったいいかなることなのかを理路整然と教えてくれる学者は私の知る限り一人もいない。そもそも一個の人間がある尺度において「成長する」という定義自体が曖昧なのである。確かにジェイムズの後期の作品はいろいろな意味で読み応えがあるし、重厚感のようなものがある。だが、それはたとえば新聞の社説やルポルタージュを読む際にも感じる「重厚感」といかなる意味において異なるのか、或いは同じなのかを説明することは難しい。結局この論議はロシア・フォルマリストが力説した「異化作用」に帰着せざるを得ない。つまり小説言語（或いは詩的言語）と伝達文の間には、使われる言語に決定的な違いがあるという幻想である。小説で扱われる言語は我々が日常会話で用いる言語と全く同じである。

ジェイムズの重厚感について渡辺久義氏はなかなかうまい比喻を提供している。

「人生の庭」を見下ろす「小説の家」の壁にあけられた窓は、一つではなく無数に存在する。現実を見る客観的な一つの眼があるのではない。それぞれの窓には眼と心を持った観察者が坐っていて、窓枠の形と観察者の意識を通過することによっては、はじめて現実は一つの像を結ぶことができる。ジェイムズにとっては、これがより確かな世界像である。「主観によって歪められた現実でなく、現実そのものを！」と叫ぶリアリストとは根本的に別の世界観に立っている。(89-90)

これと同様の比喻をドゥルーズはカフカについて用いる。

カフカの作品のなかへ、どのように入って行くか。カフカの作品は一本の根茎であり、ひとつの巢穴である。「城」には《さまざ

まな入口》があり、それらの入口をどのように使うか、それらの入口がどのように配置されているかという法則はわからない。「アメリカ」のホテルには無数の戸口がある。・・・数多くの入口があるという原理が、それだけで敵の侵入、意味スルモノの侵入、そして本当は実験にしか提示されないひとつの作品を解釈する試みを妨げる。(1-2)

表現は異なるが、両者ともに共通なのは文学作品における意味の多様性の証明である。ジェイムズの作品は我々がどこから切り込んでも、それに対する回答を与えてくれるという意味で哲学的である。次章では、『ねじの回転』について伝統的な解釈と、哲学的考察を加えてゆく。

2. 『ねじの回転』と認識の問題

『ねじの回転』ほど、主人公における認識のメカニズムが複雑な作品もめずらしい。視点人物である女性家庭教師が目撃したことを綴った手記をDouglasという男がこの作品の語り手に伝え、それを我々読者が読む。確かにこれは全て作家ジェイムズ一人の仕組んだプロットであるが、こうした「語りの多重性」が語りの歪みとアンビギュイティを生み、幻想性を増す。そして「幽霊」という現実離れたものの出現を我々に受け入れさせるのである。ここでは、この作品を用いてジェイムズにおける知覚と認識の問題について、特に解釈学の立場から論じてみたい。

この物語の「視点」について考えた場合、やはりまず女性家庭教師のそれにまず注目の目が注がれるだろう。彼女の視点におけるアンビギュイティは、たとえばエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) の指摘する通りであるが、それはテキストの中で挙げるならば、"I remember the whole beginning as a

succession of flights and drops, a little see-saw of the right throbs and the wrong." (28) という女性家庭教師による文頭の告白にも窺える。

ハンプシャーの牧師館を出たばかりの彼女にとって、上流階級の豪邸やそれを取り巻く美しい自然は心を惑わし、fancyを掻きたたせるに十分な素材であった。彼女はこの豪邸を「バラ色の妖精の宿るロマンスの城」(31)と形容することになるが、我々は彼女のこのfancyに歪んだ視点を通じて、この豪邸での出来事を目撃することになるのである。彼女の視点が複雑なのは、こうしたfancyを抱く彼女がその一方で、家庭教師という教養人であり、物事を合理的に判断する性質もまた持ち合わせていることに由来する。彼女は微に入り細を穿って、疑問を投げかけwonderする。Floraが美しい娘であると、雇い主が事前に言わなかったのは何故か。Mrs. Groseが自分を見て異常な喜び方をするのは何故か。そしてそれを隠蔽したのは何故か。こうした様々なwonderを繰り返しながら、このままさらにsuspicionを続ければ自分は不安になるだけだと、彼女は自らに言い聞かす。彼女にとってこうした不安(uneasiness)を取り除けるのはただただ子供たちの美しさであった。先ほどの引用によれば、この不安はdropsであり、子供たちの美しさを目の当たりにしたときの彼女の感情はflightsなのだと言える。しかし、物語を通じておこる一連の「幽霊」劇や、子供のinnocenceに対する不信から、彼女は子供たちの美德の背後にある陰鬱な面にsuspicionを持ち出すのである。ここで、彼女は伝統的なイギリスの教養を身につけた、理性的教養人である。彼女は次々におこるsuspicionを教養人的proofで合理化する。このsuspicion→proofは、彼女の思考回路の動きのパターンとなっている。"It didn't last as suspense—it was superseded by horrible proofs. Proofs, I say, yes—from the

moment I really took hold." (52) 彼女の思考の複雑な動きは、Mrs. Groseのその単純さと対照的である。さらに、女家庭教師の質問に対する二人の子供の周到な回答の単純さはそれをしのぐ。もっともMrs. Groseの単純さは、家庭教師という知識人に対し彼女が使用人であり文盲であるという点と大いに関係がある。

たとえば、Milesに関する学校からの通知についてのエピソードで、この使用人が文盲であることが一役買っている。彼女は、その手紙を判読できないがために、女家庭教師の口からその内容を「見る」のではなく「聞いて」知る。さて、ここで重要なのは、この手紙の解釈が、女家庭教師ただ一人に委ねられているということである。女家庭教師は手紙の内容を、"They simply express their regret that it should be impossible to keep him."(32)と伝える。だがこの時Mrs. Groseの反応はないので、彼女は"That he's an injury to the others"と勝手に解釈を加える。そこでこの解釈に初めてGroseは反応を示すという寸法なのである。因みに手紙にはMilesを学校に「置いておけない」とは書いてあるが「他人に害を及ぼす」とは書いていない。つまり、Mrs. Groseの認識は女家庭教師の眼差しを通じて行われるのであり、このことは、Quintなどの幽霊の認識についても例外ではないと言えよう。Groseは幽霊を「見た」のではなく、幽霊話を「聞いた」ことで認識していたのである。たとえば、湖における幽霊出現のエピソードで、女家庭教師の「目撃」したJesselの亡霊を「見る」ことができなかつた後も、Floraの発する恐ろしい言葉を「聞く」ことによりGroseは亡霊の存在を納得する。このように、教養人の女家庭教師と文盲の使用人を対局に置くことは、ジェームズの的確な仕掛けの一つと言える。亡霊追求の人間を二人にすることによって亡霊の信憑性を増し、しかも外部への手紙による通信は絶たれ

ているため、全ての判断が、まさに "I was strangely at the helm!" (31) の言葉通り女家庭教師に委ねられる、という周到さ。彼の言う「ふたひねり」はむしろ子供二人ではなく、この大人たち二人のことを指しているのではないか、とまで言い切ることも可能かもしれない。そして、その彼女の「舵取り」のトリガーはまさに手紙の封 (seal) を彼女が「開いた」ことによるのである。彼女がその seal を開いたことで、亡霊に対し眼を開き、その "unsealed eyes" で亡霊を目撃する。それに対し Grose の眼は "hopelessly sealed" であり、湖の場面でも Jessel の亡霊を目撃することはない。Grose の亡霊の確信は明らかに、女家庭教師の話やその際の恐怖に満ちた顔により導かれるものなのである。

I was a screen—I was to stand before them.
The more I saw the less they would. (52)

女家庭教師は自分をスクリーンと見なし、作中人物の前に立ち、作中人物に亡霊が見えないようにする。彼女の意図は亡霊を遮断することにあるが、実は、彼女が亡霊を映し出す映写モニターとしてのスクリーンだったとしたらどうだろうか。Mrs. Grose は彼女の恐怖に満ちた表情から亡霊を認識するが、結局は亡霊を見た後の彼女の顔ほど恐ろしいものはなかった。たとえば Grose と女家庭教師が連れ立って行く先ほどの湖の場面では、女家庭教師が亡霊を目撃するにも関わらず、Grose は絶叫する彼女のほうに恐怖を抱き、Flora はまるで彼女のほうが悪魔であるかのように、彼女を硬く重々しい表情で見る。これと同様のことがラストの有名な場面—— "...you devil!" (116) の Miles の叫びに要約されているのである。Miles は眼が seal されているために亡霊を見ず、代わりに女家庭教師に向かってこう叫ぶのである。つまり、子供たちにとって、見ることのできる幽霊＝悪

魔は女家庭教師そのものだったのだと言える。

さて、ここで今一度、この物語の信憑性が女家庭教師の「眼差し」に委ねられていることに注目しなければならない。Grose や子供たちは女家庭教師というスクリーンに悪の存在を見たが、実は、彼女自身も Grose や子供たちの表情から判断の材料を読みとっていたことにはかわりはない。nervous な彼女は相手の見せる表情から wonder し proof を確信する。つまり、彼女の判断の基準も自分の視覚を通して見た表情＝スクリーンから aware しているに過ぎないのである。また、前に述べたことであるが、彼女のロマンス熱に浮かされた視点では、彼女の proof は「証明」と言うには信憑性に乏しい。

だが、この件について、たとえば次の一節を引き合いに出し反駁を試みる者もいる。

I found that to keep her thoroughly in the grip of this I had only to ask her how, if I had 'made it up', I came to be able to give, of each of the persons appearing to me, a picture disclosing, to the last detail, their special marks—a portrait on the exhibition of which she had instantly recognized and named them. (58)

つまり、彼女の二つの亡霊の描写は、ちょうど Grose の知る Quint と Jessel の姿に一致するというのである。ところが、ここにジェームズが解明を試みる人間の「認識のメカニズム」が存するのである。この二つの亡霊を彼女が認識する場面を今一度考察しよう。彼女が初めて Quint を目撃するとき、彼女はすでに「誰かに会ったら、小説のように charming なことだろう」と期待しているのである。そして「私の想像 (imagination) が一瞬にして現実化した」かのように男に会う。

これは、この亡霊が彼女の「想像

(imagination)」から生まれたことを暗に示しているが、このとき彼女はまだこの男を見知らぬ男ではなく自分の憧れの雇い主だと思っているのである。彼女は明らかに自分の理性・判断で自分の視覚を操作している。その後食堂の窓ガラスのところでもまたこの男を目撃、その顔つきや身なりを Grose に事細かに説明する。詳細を求めるのは proof 癖のある彼女の気質によるものだが、こういった数々の特徴は、恐怖に浮かされた彼女の imagination がまさに産み出したものと言える。ところが Grose はこうした彼女の細かな描写に対応できる imagination を持っておらず、その結果 Grose が反応した彼女の言葉は、"an actor" "a gentleman" "somebody's clothes" のわずかに3つの単語であった。わずかこの3語で彼女が Quint を言い当てたとするのは少々無理がある。むしろ Quint は彼女が邸を囲む風景や漂う空気から築きあげた imagination の産物であるとするのが妥当である。

一方 Jessel について、女家庭教師はすでに雇い主から予備知識を与えられている。その結果彼女は Jessel の死因について suspicion を抱いていた。そして、アゾフ海と名付けられた湖のそばで彼女が Jessel を目撃する経緯は、その亡霊が彼女の imagination から産まれたものであることを裏書きする。

彼女は誰かがアゾフ海の反対側からこちらを見ていることを aware する。しかも、彼女はこのときはその亡霊を目撃してはいない。それにも関わらず彼女はこう確信する。

There was no ambiguity in anything; none whatever at least in the conviction I from one moment to another found myself forming as to what I should see straight before me and across the lake as a consequence of raising my eyes. (53)

闇や霧など彼女の視界を閉ざすものはない。このことが、つまり彼女の知覚に確信を持たせるわけだが、見ていないものを確信することに根拠はないのだ。また、彼女のこの経験は、Grose と出会う際の確信、つまり、"I was conscious as I spoke that I looked prodigious things, for I got the slow reflexion of them in my companion's face." (54) というように、彼女は自分の感覚を Grose の顔の reflexion で裏付けるのである。これは前に述べた Grose の表情をスクリーンとして知覚するというのと同様である。彼女は reflexion により増幅された imagination で Jessel を詳細に描写する。だが今度は Grose の知っている Jessel の姿と全く一致しない。つまり彼女の Jessel に裏付けはないのだ。

このように、女家庭教師が亡霊を目撃する際必ず彼女の imagination が先行している。そしてその imagination が作り出した亡霊を彼女が目撃したという情報に信憑性はない。だが、これら一連の視点の歪みを一笑に伏すことはできない。Miles には Quint、Flora には Jessel が必ず付いて廻るということは興味深いところである。女家庭教師は Miles と Flora の子供らしくない unnatural な面に suspicion を持つ。そしてこの unnatural な面は Quint、Flora の影響と考えられる。だが、彼女が子供に見た unnaturalness は、子供としては unnatural だが、特に Miles は natural man としての性質を十分見せていたのである。だから、女家庭教師が Miles や Flora のそれぞれ、natural man, natural woman 的な性質を感じ取っていたということになる。特にこのことは、Miles が natural man 的な自由を求めることに端的に表れる。こうした子供の美しさの中に見る natural man, natural woman がこの作品の主題の一つであることは、次の一文が明確に示してくれる。

I could only get on at all by taking 'nature'

into my confidence and my account, by treating my monstrous ordeal as a push in a direction unusual, of course, and unpleasant, but demanding after all, for a fair front, only another turn of the screw of ordinary human virtue. (108)

どんなにそれが異常なふるまいと思われても、子供たちの美德をもう一捻りしてみれば、そこに人間の本质、すなわち nature を認めることができる。つまりこの「ねじの一捻り」とは、子供たちの charming な性質の裏にある nature にあったのだと言えよう。

さて、このあたりの一連の子供に対する疑惑——これはたとえばホーソン (Nathaniel Hawthorne) が教会にたいして抱いた不信と酷似していることが見て取れよう。たとえばホーソンの「若いグッドマンブラウン」 ("Young Goodman Brown", 1835) に次のような件がある。若いグッドマンブラウンは、若妻 Faith が制止するのも聞かず、日没の時刻に森へと出かけてゆく。目的地は明確には明かされないが、その悪魔の住処とも言える森の中で、彼は、自分が常日頃信心深いと信じていた人々——牧師や隣人——が悪魔の集会に向けて森の中を進むのを目撃する。そして、一番信じていた Faith までもが森に「いる」ことを認識する。最終的に彼は人間不信になり、教会の宗教的信心をも疑う人間になってしまうのだが、ここで重要なのは、ホーソンが読者に対して投げかける一言である。「果たしてそれは夢だったのか。」この問いかけはそのまま我々が今問題にしている問いかけと共鳴するのである。「果たして女家庭教師は幽霊を見たのか。」「果たして子供たちは幽霊に感化されたのか。」森をグッドマンブラウンの心の中のできごと、心を映し出す鏡だとすれば、彼が森で認識したものは、全て、認識の前からア・プリオリに彼の中に疑

惑が存在し、その疑惑が目撃を促したと言える。こうしたグッドマンブラウンの認識のシステムは女家庭教師の場合と同じであると言える。つまり、霊とか悪魔の儀式とか、読者が信憑性を問うものについて、読者に対し「問いかけ」を投げかけるという手法は、ホーソンからジェームズへと正確に受け継がれていると言えるだろう。

3. 『ねじの回転』と哲学的概念に関する諸問題

3.1. 『ねじの回転』と強迫神経症

『ねじの回転』における女家庭教師のモチーフは、たとえば、ラカンの1932年の論文に出てくる「エメ」の例と似ているところがある。これは、パリの女優ユジェット・デュフロアに斬り掛かったという有名なエピソードによるものだが、これは彼女の強迫神経症が引き起こしたものであることがわかっている。ジェームズの女家庭教師は、自分の心理状態に対し執拗な解説を求めるという点で、強迫神経症的である。また、彼の初期の傑作『デイジー・ミラー』 (Daisy Miller, 1878) における、主人公 Daisy の仕草や身振りの反復は、単に男である視点人物 Winterbourne の視線を惹くという行為にしては、かなり強迫的である。エメの症例は、たとえば、『嘘つき』 (The Liar, 1888) における大佐が自画像に斬り掛かる行為と重ね合わせることができる。大佐の絵を切り裂く行為は、「嘘つき」である自分の姿を抹殺しようとする大佐の自虐的行為と説明することができる。エメは、デュフロアを襲う際、実はエメ自身を抹殺しようとしたのだ、とラカンは説明する。つまり、他人を自分に置き換えて代理的な自殺行為を図るといえるのは、強迫神経症の症例だと言うのである。

さて、ここでラカンの有名な鏡像段階理論に注目してみよう。ラカンは乳幼児の過程を

昆虫の擬態に置き換える。昆虫の擬態は敵からカモフラージュするためにあるのではなく、環境への自己同一化にあるのだとする。乳幼児は生まれ落ちた瞬間混沌のなかにいる。そこで乳幼児は目に見える何かに自己を投影することによって、対象（他者）になろうとするのである。ラカンにおける基本的テーゼは、「自我は偽証する」ということである。ポイントはこの偽証が、自我の特殊な症状なのではなく、人間にとって自然な性質であるとする点である。「人は偽証する」。このきわめて自然な人間の精神の営みから、現代社会は構成されているのだと言える。女家庭教師は Flora や Miles が幽霊を見ていないと偽証しているのだと思いこむ。少なくとも彼女は人間の natural な性質として Flora や Miles といった子供でさえ、そうした偽証という性質があることを見抜いているのだ。この意味で、ジェームズはラカンの理論を予言しているといえるのである。

一方、ラカンは、鏡像段階理論を推進する際、特に強迫神経症が言葉によって構築される世界に影響していることに注目した。そして、強迫観念にとらわれる人ほど言葉の構造や関係にこだわっていることを主張した。抑圧された人間は、行動について執拗に「いいわけ」をする。その「いいわけ」とは、言葉と行動の一致、同一化を図るための営みなのである。ラカンにとっての言語活動は、ソシユールら他の言語学者と同様、専らパロール（話し言葉）に中心を置く。人間はパロールによって自らの行動のみならずアイデンティティを認識するというのである。これはすなわち言語によって構造化される世界の認識が、視覚（ライティング）ではなく聴覚（リスニング）を前提としている、ということの意味する。パロールは必ず他者の存在を伴う。問題はいったい他者がどこにいるのか、ということである。他者は外部に、つまり他人として存在するのみならず、話者の内部にも存

在する、というのがラカンの意見である。そこで、当然の帰結点として、ラカンは、発話者が話す内容ではなく、発話者が「どこから話しているか」すなわち発話者のポジションに注目するようになる。このあたりを見ると、ジェームズの「視点」への興味に至るいきさつとたいへんよく似ていることがわかるだろう。ジェームズは視点とそれが見られる対象の関係に注目したからである。

さて、先ほど「偽証」について述べたが、それがラカンの有名な「ファルス」について言い及ぶとき、それは「偽装」の問題として問われることになる。たとえば、女装趣味の男がいるとする。彼は何故女性に偽装するのであろうか。「本来女性になりたかった人間だから。」このような回答はテレビの特集でホモセクシュアルを取り上げる際に必ず帰着するものである。だが、この話題をラカンのファルス理論に照射するとき、全くそうではあり得ないことがわかるだろう。女装する人間とホモセクシュアルは本質的に異なる。ホモセクシュアルが本来女性として生きることを望む、つまり男を愛の対象とするのに対し、女装願望者は、女装しながら男性であることを望むからである。

女装は、女性の機能を持たない男性の代理行為である。一方、女性のファルス願望は、女性のペニスの欠如からくるものである。実は両者には似通った点がある。女装願望者は女性の体になる夢を見ると同時にヴァギナを欲するのであり、女性のファルス願望はペニスを所有する夢を見ると同時にペニスを女として受け入れることを欲しているのである。強迫神経症患者には女装や男装を好む者が多いとラカンは言う。強迫神経症患者は外界との接触を極端に拒み、その結果、女性や男性を自己の中に作ることによって自己充足しようとする。その結果女装や男装が望まれるのである。ここで、今一度『ねじの回転』に立ち戻ると、女家庭教師は自らを鏡像を映し出

すスクリーンとしながら、自我をスクリーンに投影し、子供たちの前で自我を偽証していた。彼女にとって雇い主は父性の象徴であって、子供たち、就中、彼女の腕の中で死ぬ Miles はファルスの代替物だったのである。

3.2. 『ねじの回転』と純粋理性

カントにおけるポイントは「悟性」と「認識」の概念を区別することにある。カントにおいて、直観は「理解されることはなく」、理解は「直観されることはない」。つまり、直観と理解は相反する存在なのである。だが人間は直観を理解につなげなければ認識に至ることはできない。

さて、女性家庭教師の認識はイギリスの伝統的な教養をバックグラウンドに持つ理性に基づくものであると一般に定義される。だが、果たして女家庭教師の理性はカントの言う「純粋理性」に基づくものなのだろうか。「純粋理性」とはア・プリオリな理性のことである。女家庭教師は幽霊の存在を「批判」し、理性で対象を見極めようとする。

ここでカントの「純粋理性批判」の復習をしなければならない。カントはまず、従来の「理性」を二種類に分類することからはじめる。一つは、推理判断能力であり、今ひとつは超越論的、ア・プリオリな対象を知る能力である。神を悟性で認識しようとする行為は、そもそも人間の理性を超えたところに存在するはずの神を人間という有限の中に取り込もうとする越権行為である。この越権行為こそ「純粋理性」の概念なのであり、それをカントは批判したのである。

それでは我々は女家庭教師をどう捉えればよいのか。彼女は絶対存在である「神」を「悟性」に取り込もうとするといった誤謬を犯していたのである。つまり彼女は、存在論的論拠に従って「神=霊」を証明しようとしているのである。

3.3. 『ねじの回転』と時間的存在

女家庭教師は幽霊を認識した、とはいかなることか。その前に幽霊は存在したのか。存在とはいかなることか。認識と存在の関係とは何か。幽霊がそこにある、と女家庭教師が認識したとき、彼女もそこに「いた」。だとすれば、彼女がそこに「いない」場合、幽霊はそこに「いる」のであろうか。女家庭教師が目撃しない場合、隣にいる誰かが認識するのであろうか。あるいは全く別の誰かがいても認識されるのであろうか。いや、誰かがそこにいなくても幽霊はそこに「いる」のか。我々がここで問うているのは、幽霊に対する人間の認識を超えた「存在」についての問題である。さて、この問いかけはどこまで続くのであろう。つまり、幽霊の在処を問う場所をどこまで拡大するか、という問題である。地球上なのか。それとも宇宙全体なのか。ここで全体という場合、すでに我々は間違いを犯している。つまり、在処について「全体」という空間的制限を加えているからである。存在とは、確かに空間上にある。あるいは「ある」と認識される。しかし、認識を超えた「存在」とは、空間的制限を越えたところにある「存在」であり、人間の認識如何は問われないのである。女家庭教師が幽霊を「いる」と言うとき、すでに幽霊は普遍的な価値を持たず、女家庭教師の認識の中でのみ「存在する」。つまり、幽霊の「存在」について、「女家庭教師の前」という空間的制限が加えられているのである。

さて、それでは幽霊の認識について前提となるものは他にあるのか。答えはすでにある。時間的制限である。存在について最初に時間の概念を持ち込んだのはハイデガーである。絶対的存在を否定した場合、人間が存在を認識する場合、必ず時間軸を伴う。なぜなら、女家庭教師が幽霊をそこに「いる」と認識する場合、彼女は「現在」という時間軸におい

て幽霊の存在を認識しているからである。今一度「アゾフ海」のエピソードについて振り返る。湖というものを見たことのなかった女家庭教師が初めてアゾフ海を見るに至る経過を時間的に追って行く描写がここでは展開される。どんどん歩いてゆき、湖に着くまでの過程。ぱっと視界が開け、湖が大部分まで見渡せるところにたどり着いた描写。湖を隔てて向こう岸を眺める時間的経過。子供を捜しながら、長い道のりを歩く過程。そして、とうとうボートが繫留されているのを発見し、Floraと幽霊の対話を直観するに至る。ここで展開される時間的描写は、幽霊の存在を時間の経過と結びつける裏書きとなっている。つまり、女家庭教師にとって幽霊の存在とは、目の前という空間的制限と、小説的現在という時間的制限の二つの制限を加えたものなのだと言えよう。

さて、ここまで検証してきた通り、『ねじの回転』は現代社会における実在する人間の精神的諸問題について、たいへん見事なモデリングを提供している。つまりそれは、人間の意識が現在という時間軸の上に構成される

ということ、人間における理性は理解力を超えた超越的世界では補完し得ないということ、そしてとりわけ、強迫神経症患者による超常現象の認識といったモデリングである。

我々の身の回りには依然として自然科学では解明し得ない問題が多く存在する。人間の精神性に関わる問題もその一つである。巷には多くの心理に関する読み物が出回り、占いに応用されたり、テレビ番組のプログラムに取り入れられたりする。だが、そうしたもののほとんどは、それをテーマに挙げながら、実際には解明を試みるどころか、むしろ、制作側ですら確信を持って扱うというよりは否定的取り扱いをしているほどである。こうしてみると、幽霊や超常現象を真正面から取り扱うことができるということは、実学的世界より創作的世界に携わる人間の特権だろう。もし、我々が霊的現象の認識に悩み、或いは恐怖を感じるなら、ジェイムズの作品群が、そうした問題を解明するとは言わないまでも、少なくとも説明の糸口を与えてくれることは間違いないのである。

Works Cited

- Armstrong, Paul B., *The Phenomenology of Henry James*, U of North Carolina P, 1983.
 Bell, Millicent, *Meaning in Henry James*, MA: Harvard UP, 1991.
 Deleuze, Gilles, *Kant's Critical Philosophy: The Doctrine of the Faculties*, trans. by Hugh Tomlinson and Barbara Habberjam, London: Athlone, 1984.
 ———, *The Logic of Sense*, trans. by Mark Lester, NY: Columbia UP, 1990.
 Deleuze, Gilles and Felix Guattari, *What Is Philosophy?*, trans. by Hugh Tomlinson and Graham Burchill, NY: Verso, 1994.
 Eagleton, Terry, *Literary Theory* ——— *An Introduction*, Oxford: Basil Blackwell, 1983.
 Gard, Roger (ed.), *Henry James* ——— *The Critical Heritage*, NY: Routledge, 1982.
 Graham, Kenneth, *Henry James* ——— *A Literary Life*, London: Macmillan, 1995.
 Hagberg, G. L., *Meaning & Interpretation: Wittgenstein, Henry James, and Literary Knowledge*, Ithaca: Cornell UP, 1994.
 Hawthorne, Nathaniel, "Young Goodman Brown" in *The Portable Hawthorne*, ed. by Malcolm Cowley, NY: Viking, 1950.

- Hocks, Richard A., *Henry James* —— *A Study of the Short Fiction*, MA: G.K. Hall & Co., 1990.
- James, Henry, *Daisy Miller: A Study in Tales of Art and Life*, NY: Union College P, 1984.
- , "The Liar" in *Henry James: Tales of Art and Life*, Union NY: College Press, 1984.
- , *The Turn of the Screw*, ed. by Peter G. Beidler, Boston: Bedford, 1992. 本文のページ番号はこの本による。
- , *The Turn of the Screw*, ed. by Deborah Esch and Jonathan Warren, NY: Norton, 1966.
- Matthiessen, F.O., *The American Novels and Stories of Henry James*, NY: Alfred A. Knopf, 1956.
- Rawlings, Peter (ed.), *Critical Essays on Henry James* (Critical Thought Series: 5), Eng.: Scolar P, 1993.
- Williams, Merle A., *Henry James and the Philosophical Novel: Being and Seeing*, NY: Cambridge UP, 1993.
- 秋山正幸『ヘンリー・ジェームズ作品研究』南雲堂、1981年
- 芦原和子『ヘンリー・ジェームズ論考』北星堂書店、1985年
- イーグルトン、テリー『文学とは何か——現代批評理論への招待』大橋洋一訳、岩波書店、1985年
- ギャロップ、ジェーン『ラカンを読む』富山太佳夫訳、岩波書店、1990年
- ジェームズ、ヘンリー『ヘンリー・ジェームズ自伝——ある少年の思い出——』舟阪・市川・水野訳、臨川書店、1994年
- ナシオ、J=D『精神分析7つのキーワード——フロイトからラカンへ』榎本譲訳、新曜社、1990年
- ドゥルーズ、ジル『カフカ——マイナー文学のために』宇波彰・岩田行一訳、法政大学出版局、1978年
- ハイデガー『存在と時間』上・中・下、桑木務訳、岩波文庫、1960年
- ベルクソン、アンリ『記憶と生』ジル・ドゥルーズ編、前田英樹訳、未知谷、1999年
- 藤田榮一『生と自由を求めて——ヘンリー・ジェームズの小説——』創元社、1980年
- 渡辺久義『ヘンリー・ジェームズの言語——文学の言語を支えるものについての試論——』北星堂書店、1998年

Henry James's *The Turn of the Screw*

—The Problems of Memory and Recognition—

Nobumoto IRIE

(Received March 30, 2001)

ABSTRACT

Henry James's *The Turn of the Screw* shows one of the best models of recognition made from the structure of memory and human vision and audition. Since recognition determines the root of the structure of spirit, it can destroy it completely. We all depend upon various senses, such as vision and audition for our recognition. Few novels have more complicated mechanism of the recognition of the heroine than *The Turn of the Screw*. A governess, the heroine of the book, wrote what she had witnessed, and Douglas introduces her writing to the narrator and we read it. All these are the plots, which are plotted by James, and "the multiplicity of narrative" creates the distortion and the ambiguity of narrative. Therefore the book gains fantasy and the readers are convinced of the arrival of the ghosts. When considering "the point of view" in the book, we naturally pay attention to the ambiguity of the point of view of the governess as Edmund Wilson points out. For the governess, who has learnt British traditional culture, the luxurious mansion of high society and the picturesque scenery of nature are the materials sufficient to arouse her interest and imagination. She, highly educated and rational, rationalizes a series of arrivals of ghosts and the children's aberrant behaviors. And the authenticity of the story depends upon the governess's "eyes" which is distorted by the cult of romance. We can discuss the book from a philosophical point of view, such as obsessional neurosis of Lacan, pure reason of Kant, and temporal being of Heidegger. It is no doubt that *The Turn of the Screw* offers the clue of these philosophical problems.

KEY WORDS

eyes, ghost, man of reason and high education, imagination, obsessional neurosis, temporal being